

1. 犬のエサの食べ方 — 質問・疑問からの一考察 —

1) 「餌を丸飲みする」について

〔咀嚼しないで食べる〕

わが家の柴犬は、アッと言う間に食餌を平らげてしまい消化しているのか不安です？との質問が多くあります。場合によっては、輸入犬種と比較して「この犬は下品な犬」で困るとさえ考えている方もおります。ここではそれらに関連した内容に触れてみます。

はじめに、ここで言う「かむ」は咀嚼を使った意味が込められる。従って「齧る」の場合は「骨を齧っている」となるし「咬」の場合は、犬たちが喧嘩をして「わが家の犬が咬まれた」となる。何故、こんな理屈を言うのかお叱りを受けそうだが、実は、犬は食物を飲み込む時には「咀嚼」を使って食べていないのです。つまり、かみ砕くとか、かみ千切るという事はあっても、咀嚼することを進化の過程で選ばなかった動物なのです。

〔丸飲みが普通〕

従って、犬は人からみると「丸飲み」です。丸飲みでもいいように、沢山の「よだれを分泌します」。犬の唾液は、消化を助けるためのものと言うよりは、むしろ丸飲みし食道を通過する時に滑りやすくしているとも考えられているようです。人の場合は、良く噛んで、つまり良く咀嚼しながら唾液を分泌させます。そのような違いは「顎」の構造や、口の中の嗅覚器官（ヤコブソン器官）とか、「歯」の形にもはっきりと現れています。唾液の分泌に関する有名な研究では、ソ連の「バブロフ」の実験があります。こうした「構造」について詳しく知りたい場合は、解剖学の分野を参照していただく事にしここでは本題を先に進めます。

〔大昔から・・・〕

犬の祖先とも言われてるオオカミは、集団で草食動物を獲物にし、骨でも生肉でも早く食べるという習性があったようです。人と違って、犬はこうした野性時代の頑丈な胃袋を受け継いで「ガッガッ」と丸飲みしても充分消化するように適応しております。むしろ、野性時代から“早く食べるのも能力の一つだ”と言う訳で、それが今で



も受け継がれているのです。

〔欠陥？・・・〕

こうした犬の食べ方には、重大な欠陥があります。それは、咀嚼に頼らないで飲み込むので、有毒物質とか異物でも匂いの性質次第ではそのまま胃袋に納まってしまいうからです。例えば、ある集団のネズミなどは毒物によって仲間が死ぬと、その危険を知らせる手段があるとされています。従って、これだけ人の知恵で毒物や物理的にも攻撃されていても、ネズミたちは相変わらず生存する環境を獲得しています。

〔犬は毒を知らない〕

ところが犬の進化の過程では、「毒物」に対する学習が殆ど無い様です。従って、これからますます近代化し多様化する環境では、予想外の事故も生ずる事になります。例えば、庭に置かれた殺虫剤などを舐める・食べるとか、散歩中には、除草剤を舐めてしまったり、触れたケースなどの事故例は、余り公表されていない様ですが意外に多いのです。

〔味蕾・・・〕

それは何故なのでしょう。その一つに、前述したように丸飲みすると言う習性があり、「味覚」に対する感度はそれほど発達しな

ったと言う事があります。色々な「味」による刺激は、味覚器である「味蕾」と言う部分によるものであり、それは、それぞれの動物によって機能的に分化していると言われていいます。

〔味の知覚・・・〕

例えば、人の舌には味蕾が 9,000個、犬は1,706 個であり、ウシは約35,000個、コウモリは約 800個という報告もあるのです。つまり、草食動物は毒草を食べる危険度が多いので、食物の選択についての機能が発達しているのです。これに反して、コウモリなどの食物は中心が昆虫などの肉食にあるので、種類も均一化し危険も少ないので味蕾も発達しなかったという考え方もあります。つまり、味蕾の発達は動物の食性と深い因果関係があるのです。

〔進化した味覚？〕

また、人に飼育されるようになってからの犬たちは、雑食であり中でも甘味を好む傾向があります。最も嫌いなものは苦味・辛味であり、酸度が強くなっても嫌う傾向にあります。私たちが日常的に、柴犬たちを飼育して感じるのは、彼らが味覚によって食欲が旺盛になると言うケースは稀なことです。柴犬たちの味覚の特徴には、必ず嗅覚が先行して食物の選択をしている様子が観察されます。

人に飼育されるようになってからの犬たちには、一方では肉食ではなくなっている要素もあります。その理由としては、犬とオオカミでの小腸の長さを比べると、1.5 倍も犬の方が長いという点があげられている様です。

〔人が左右した？〕

横道にそれますが、もし、お宅の犬が味覚で食物の選択をすとしたなら、前述のような犬の食に対する特徴から、それは例

外となります。それは、主として 1頭を室内で飼育された場合に多く、無理に食べなくても済むからです。人の食文化や生活環境から考えると、こうした傾向はますます増えるのではないのでしょうか？

〔犬の偏食？〕

また、犬の飼育の本などに、理想的な食餌は、元来が肉食だったのでそれで充分だという誤った記述もあります。野性時代と違って、人が与える肉（赤身の肉）にはカルシウム、リン、ヨウ素、銅、脂溶性ビタミンなどが充分含まれていないのです。従って、肉食によって私たちが飼育する柴犬たちの必要量を満たそうとすれば、多分、相当な無理が起ころうでしょう。

また、カルシウムやその他の栄養が含まれているというので「牛乳」を与える方もあります。牛乳にはかなりの量の乳糖が含まれており、多くの柴犬には消化することができない状態が起こります。ひどい場合には、牛乳を与えた事が原因で下痢が誘発され、それが長期に続く事もあるようです。

〔間違い〕

犬の食物にあれがいい、これがいいと言われ食餌の内容を極端に変化させるケースも良く聞きます。この場合でも、健康上何の問題もないのに下痢を誘発したケースも観察されます。こうした、犬の食に関する分野は、まだ良く解明されていませんが、極端な「科学的成分変化」によるものだと考えられます。

〔一つのテスト〕

例えは違いますが、私の体験では種類の違う生肉を与えると、好んで食べる場合、土に埋めてある程度熟してから食べる場合などが観察できます。こうした現象を考えると、発酵することでアミノ酸が増え「うま味」が出ると言う考え方もあります。犬達の



好物には、チーズとか味噌などの「発酵」食品が多く挙げられます。(秋田に転居して間もない頃のことです。軒下に置いてあった味噌桶が雄犬に発見され、気が付いた時には約1kgの味噌を食べられた事があります。)

〔発酵食品への執着〕

こうした、アミノ酸が多く含まれる食餌を好むとするなら、犬たちにも多少の味覚があると考えていいかも知れません。

犬の食性に対する特徴(嗅覚で判断し丸飲みする)をかき摘んで思いつくまま述べましたが、まだまだ科学的には解明されない点は多く残ります。

自分(犬)で食物を選べない環境に置かれている点を考えて、食餌はそれぞれの飼育目的に沿って工夫したいと願います。そして、柴犬たちの野性的な雰囲気を見失わないための、バランス良く安定した内容を更に研究することが、これからの飼育者としての課題なのです。尚、本シリーズ「縄文柴犬の食餌について」を参照して下さい。

2) 拾い喰いについて

〔柴犬の習性〕

以上、柴犬の習性を念頭に置いて、本項を考えてみます。

散歩中に、犬が拾い喰いをする。普段はちゃんと餌を与えているのに——まるで私が食べさせていないようで、恥ずかしい——と、これも良くある話です。この問題は、どれだけ沢山の餌を与えているのかということとは別問題です。つまり、前記で述べた彼らの特徴に加え、「嗅覚」による記憶が関連していると思われるのです。人の場合は、視覚で記憶すると言う解釈を、犬に当てはめると彼らは匂いで記憶している様子が観られます。

〔柴犬の嗅覚〕

仔犬時代に飼育していた犬たちが、新しい飼い主のもとで成犬になり発情し、交尾のために戻って来ます。早い場合で6か月後、遅い場合には数年後にもなるのですが、それまで全く違った環境で育ったにも関わらず、飛行場で受け取り車に乗せると間もなくの事です、久しぶりの記憶にある私の匂いを覚えている行動を明確に示します。

〔散歩中〕

散歩の最中に、彼らは路面を舐めるように行動しています。そして、色々な匂いの情報を得ている訳です。そうした中で、彼らの

食物につながる記憶に共通した匂いが挙げられます。例えば、ミミズ、カエル、ヘビ・・・、小鳥の死骸など「干乾し」になったものを好む傾向があります。また、清涼飲料などの空き缶なども拾いますが、こうした甘味の匂いが残された物も意外と喜んで拾う傾向が見受けられます。

〔どうするか〕

然し、拾い喰いを許すということは彼ら自身の安全のためにも決して望ましい事ではありません。では、どうしたらこうした問題を防げるのでしょうか。

彼らが、こうした拾い物をする行動を注意すると、その殆どが飼い主を「無視」している点に気がきます。つまり、散歩は自分(犬)が中心になって行動すると、飼い主はそれに従ってついて来る、と日常的に学習している場合ではないかと判断されます。

反対に、日常的に飼い主を絶えず注目しているような関係が成り立っていれば、勝手に行動する事にはなりません。例えば、日常的に犬との会話など・・・飼い主に注目するように学習させていた場合には、怪しげな行動になっても話しかけるだけで中止の態度になります。

〔柴犬から信頼されること〕

散歩に出ても、犬たちが絶えず飼い主の行動に注目するようになるための大切な条件の一つには、飼い主は例え短時間でも日常的に犬たちと「接し遊び」ます。この遊びには、飼い主の指導性が大切で、「楽しいことがある」と言う関係になる事です。そして、その遊びの行動を通して、多くの学習行動が蓄積されていくと思われれます。彼らは仔犬時代からの日常的な成長過程で、そうした飼い主に対しての様子を驚くほど観察し判断していると思われれるのです。

(1996. 3. 15初稿・2002. 7 修正)



II. 「犬が糞を食べる」を止めさせるにはどしたら良いのか？

【食餌内容のチェック】

この問題を解決出来た例として、例えば、主食が乾燥ドッグフード100%の場合、そのフードは2~4割くらいにし、適当な量の煮干しや野菜を入れ、残りを御飯にする。それに良質の塩分を少々加えて2週間くらい様子を見ます。それでも、まだ改善が見られない場合は、更に、その内容に海藻類を少々加えるなどの変化・工夫をしながら続けて行きます。

【飼い主は神経質にならない】

一方、犬が排泄する時に、騒がないよう(特に子供さんに教えておく)にする。この問題は、飼い主やその家族が犬の排泄行動に対して、必要以上に神経質になると犬も敏感にそれを感じとり、自分の排泄物を隠そう(自分の「物」と言う意識が働くようでもあります。)としたり、不安定で回数も多くみられる様になります。ですから、糞をかたづける時なども、静かに始末するようにしてください。

【何故？糞を食べる】

昔から「糞を食べる癖」の対策として、色々な方法が言われています。最近の傾向では「薬物」を与えて矯正する方法がよいとの説もあります。また、糞を食べなくなる食餌とか、薬草とか色々市販されているようです。

しかし、「糞を食べる」と言う行為の根本の原因について、動物行動学の立場での説明には、「狭い檻などに閉じ込めている場合

に多い」と、むしろ環境によるストレスが原因だと主張しています。一方、栄養学の立場からの説明では、基本的な栄養分が不足するからだ、との説明もあります。しかし、これらの説明にも疑問があります。

【何かが不足か？】

これらの何れの説にも共通するのは、「何かが欠けている」と考えられることです。犬の側から考えると、糞を食べるのは「必要な行為である」と理解してみると、随分気が楽になります。その上で、良く観察しながら対策を検討する必要があります。決して、画一的ではないと私たちの研究からは言えそうなのです。

例えば、複数の飼育された環境では、先輩犬が糞を食べるのを見て真似をして、それを切っ掛けにしての場合もありました。庭で放し飼いにしていた条件にも関わらず、糞を食べていましたが食餌の内容(前述「食餌内容のチェック」又は、本シリーズ2、「縄文柴犬の食餌について」など参照)から、その後は「糞を食べなくなった」との実例は沢山挙げられています。

【とにかく直るんです】

結局は、糞を食べる理由として何が原因なのか、良く判っていません。しかし、私たちの研究では様々に事情や条件は違いますが、その環境を生かす一寸したきっかけから、糞を食べなくなったと言う事実があります。(2001.7)



III. 高齢犬のくらし

(はじめに)

柴犬研究会発足当時、仔犬を飼い始めた会員の方々の許では、その愛犬が高齢になり付随して発生するさまざまな問題に直面していることが報告されています。高齢犬の飼い主として地域の獣医師会から表彰されたという、うれしい話題もあります。

「犬はヒトよりも早く歳をとる」このことに気付かず、「近頃うちの犬はどうしたのだろう・・・」と悩むかたもあります。

犬は生後1年でオトナになり、3～4年で壮年期、7～8年で熟年期を迎え、最近の資料では10歳くらいが平均の寿命といわれています。

毎日のくらしの中でのちょっとした心がけ次第で愛犬が元気に長生き出来る・老犬が幸せに暮らせる・・・ということをお願いながら、飼い主としての注意事項をまとめてみました。

(食餌について)

当会のホームページや会報で、食餌についてたびたび取り上げてきましたが、最近の愛犬雑誌などでもようやく食餌内容に野菜・魚・米飯などを取り入れることをすすめる記事を見かけるようになりました。人間の痴呆予防と同様、犬でも青魚などに多く含まれているEPAとかDHAなどの成分が効果をもたらしてくれるそうです。「日本犬の昔の食餌は魚が主でした。しかし、現在は肉食（フードの主原料のほとんどが肉）です。魚を食べる事によって摂取できていたEPAやDHAの摂取が食餌の変化によってできなくなったために、痴呆の症状が日本犬種に多く出るようになったことが考えられます。(愛犬チャンプ・2002.11月号)」特に加齢により歯垢などからの疾患、或いは代謝機能の衰えなどに対応するため、消化の良い食餌と併せて「水分」をたっぷり摂取出来るようにするなど、様々な犬の状態を見た上での配慮やくふうが大事になります。

(行動について)

高齢になれば内臓や関節・感覚器などの機能が低下するのは人間と同様です。歩き方に変化はないか？それまで跳び上がったところに上られなくなったか？曲がり角などでぶつかったりしないか？おこりっぽくなった、怖がりになった、夜啼きを始めるとなかなか止めない、等々。愛犬の変化の様子を観察して、適切な判断や対処をしてやりたいものです。

(環境について)

温度変化が極端な場合、その影響を受けやすくなるので、季節に応じた対策をキメ細かく。特に寒さ対策をしっかりと。日本犬は寒さに強い、とだけ単純に考え対策が後手になって失敗する例が多くあります。けれど過保護にする必要はないでしょうが、それぞれ地域や室内または室外での飼育条件に対応した対策を考えてやりましょう。

また、暑さについても同様です。単純に日陰だから、とつないだ場所が午後には強い日差しにさらされる場合もあります。飲み水などについての配慮もお忘れなく。通風・雨除け・コンクリートの照り返し等々についても考えてやってください。

(終わりに)

元気なままに老後を迎えさせてやりたい、とあなたも願っておられると思います。そのためには前述のような配慮とともに、愛犬が飼い主に愛されている、という安心感を持って暮らしていけるような日常のふれあいが何よりも大切なのではないでしょうか。加齢とともに犬は反応が鈍くなり、呼んでも知らぬ顔でいたり、寝てばかりいることも多くなりますが、静かに話しかけたり体をなでたりして、スキンシップを図りましょう。その「時」の大切さは後日、しみじみとわかるはずですから。(2003.2)

